

『東方』二八七号より

出土資史料から見直した

前近代中央アジアの歴史

森部 豊（学習院大学）

日本における中央アジアへの関心は、いつから始まったのだろうか。かつて西本願寺の大谷光瑞が、彼の私的探検隊を中央アジアに送りこんだのは二〇世紀初頭のことであった。当時、イギリスやフランス、ドイツなどの列強の探検隊が東トルキスタンや敦煌の地から数多くの古代の文書や、その他の文物などを発見し、中央アジアの歴史・言語・宗教などの研究が急速に進展したことは有名な話である。戦後、NHKが「シルクロード」を冠した番組を放映し、一般からも「シルクロード」の名を介して、中央アジアに大きな関心が寄せられ、今なおその傾向は持続しているといえる。一方、我が国の学界では「シルクロード」から安易にイメージされる中央アジアの単一な見方、すなわち東西交易や東西文化交流の通過・中継地点としての中央アジアという見方に対し、中央アジアの地域に立脚した歴史研究を提示し始めていた。そこでは、旧来の日本における前近代の中央アジア史研究が漢文史料にもとづいたものであったのに対し、現地語史料を利用した研究方法が提示されたのである。ここで紹介する『中央アジア出土文物論叢』は、この流れの最新の中央アジア史研究に位置づけられるものである。以下、本書の内容を収録順に見てみたい。

森安孝夫「序文——シルクロード史観論争の回顧と展望」は、本書の出版の経緯と、副題にある「シルクロード

森安孝夫責任編集

『中央アジア出土文物論叢』

A4判・一九八頁・朋友書店・六、三〇〇円



史観」をめぐる研究史の整理をし、本書の立場を説明する。

森安孝夫「シルクロード東部における通貨——絹・西方銀銭・官布から銀錠へ」は、ウイグル文書の精緻な文書研究とスケールの大きな史観によつて、中央アジア（東西トルキスタン・西北インド・チベット）および内外モンゴリア・中国華北（甘粛・陝西・山西・河北）における六世紀から一四世紀の通貨問題を解き明かす。森安はウイグル文書の分析から、一〇〜一一世紀の西ウイグル王国では棉布が主要な通貨であり、一三〜一四世紀のモンゴル時代になってウイグルスタンでは銀が主となることを論証する。さらに、宋代では遼を介して中国の銀が西方へ流出し続けたという従来の説を否定し、ユーラシア規模での銀の流通がモンゴル時代に形成されていたプロセスを描き出す。

松井太「シヴシドゥ・ヤクシドゥ関係文書とトヨク石窟の仏教教団——ペテルブルク所蔵ウイグル語世俗文書簡記」は、近年、精力的にモンゴル時代のウイグル文書の研

▼『東方』287号より

一 出土資史料から見直した前近代中央アジアの歴史

▲ 森部 豊

クリックすると次の段にジャンプします。

究に取り組んでいる同氏の最新の研究成果。ペテルブルク所蔵で近年東洋文庫にマイクロフィルムとして将来されたウイグル語世俗文書をとりあげた本論文は、同文書を個別に扱うのではなく、異なる文書に頻出する人名などに着目してグループ分けをし、文書作成の歴史的背景を共通とする文書群を見出す。論文名にある「シヴシドゥ・ヤクシドゥ関係文書」は松井の命名によるものである。松井はこの文書群の作成年代を一三世紀なかば、作成地域をトゥルファン東方のトヨク一帯とし、「シヴシドゥ・ヤクシドゥ関係文書」をトヨク石窟と密接な関連をもつものにとらえる。そして、同地域におけるウイグル仏教教団の実態の解明を今後の課題とする。

百済康義「梅檀瑞像中国渡来記」のウイグル訳とチベット訳」はチベット語テキストの「梅檀瑞像中国渡来記（以下、チベット訳本「渡来記」）を日本語に翻訳すると同時に、「渡来記」の内容に近似する漢文テキストである程鉅夫「勅建梅檀瑞像記」と比較しながら詳細な注釈を加えた力作。チベット訳本「渡来記」のオリジナルは中国語で書かれた歴史書であるが、それは未だ特定できていない。またチベット訳本「渡来記」は、ウイグル訳本から翻訳されたことは判明するが、ウイグル訳本もまだ発見されていないという。百済は以上の二点を残された問題として指摘し筆をおいたが、残念なことに昨年逝去された。謹んでご冥福を祈りたい。

松川節「モンゴル語訳『佛説北斗七星延命經』に残存するウイグル的要素」は、トゥルファン出土の一四世紀のモンゴル語訳仏教文献『佛説北斗七星延命經』にウイグル的要素が存在することを論証する。トゥルファンで出土した一三〜一四世紀の史料であるモンゴル語文献には「二つの

トップページにもどる

文化的要素——モンゴリズムとウイグルリズム——の混淆形態」が見られるが、一七世紀以降にはチベット仏教文化の影響を受け、その書式にチベット・スタイルが外来要素として入り込んでいくという。松川は一四世紀のモンゴル語訳仏教文献『佛説北斗七星延命經』を、同経典のウイグル文テキストと複数のモンゴル文テキスト（一七世紀以降のもの十数点を松川は五グループに分類）の訳語を比較検討することにより、一四世紀のモンゴル語訳仏教文献『佛説北斗七星延命經』が同経典のウイグル語訳原典と非常に「似通った環境で作られた」ことを論証する。

蓮池利隆「西域南道と西域北道のカロシユティー文字資料の比較」は、龍谷大学が所蔵するカロシユティー文字資料（以下、龍谷資料）のうち木簡二点と紙断片資料二点、さらにドイツ探検隊が将来したカロシユティー文字資料（以下、ベルリン資料）七点のトランスクリプションと日本語への翻訳を試みたもの。蓮池は、龍谷資料は西域南道のおそらくニヤ遺跡で、またベルリン資料は西域北道のクチャ近郊のキジル千仏洞で発見されたものと推測した上で、両資料ともにサンスクリット化が見られるが、その変化には一〜二世紀の差があったとする。また、ベルリン資料の内容検討を通じ、キジル千仏洞周辺の仏教教団がオアシス都市クチャからの経済的支援を受けていたことを述べる。

荒川正晴「トゥルファン漢人の冥界観と仏教信仰」は、トゥルファンのアスターナ古墳群から出土したトゥルファン文書のうち、葬礼文書を取り上げ、それを高昌郡時代（三二七〜四五〇年：第一期）氏高昌国時代（五〇一〜六四〇年：第二期）、西州時代（六四〇年〜八世紀後半）の三期に分類し、それぞれの時代におけるトゥルファンに居

住していた漢人の冥界観の変遷を跡付けるとともに、彼らの仏教への信仰が、中国の河西や華北における漢人仏教徒との冥界観と関連していることを指摘する。

吉田豊「cāmūkの来源についての一考察」：Some Reflections about the Origin of cāmūk」は、ソグド語の cāmūk の来源について考察したもので、英文によるペーパーに日本語要旨が付されている。吉田は、古代中国人が「昭武」をソグド人の姓と認識していたことは誤りであり、「昭武」の語源は「七世紀頃のソグドの諸王の人名の一部に見られる要素 cāmūk による」とを論じる。やらに cāmūk という要素はエフタル語に由来することを仮説として提示する。

武内紹人「チベット語木簡概略」は、かつてスタインがイギリスへ将来し、現在は大英図書館に所蔵されているチベット語木簡を概略したもの。近年、このチベット語木簡約二三〇〇点の再整理がなされ、新たな整理番号が付されたのと平行し、保存作業、デジタル撮影作業が行われた。武内は、チベット語木簡の調査および解説、カタログ作成にとりかかったが、本論文はその過程の様子や、日本史研究者との共同調査による木簡の形状分類について述べている。

坂本和子「トゥルファン出土の三織物断片——西方より将来の証拠として」は、トゥルファン出土の織物を取り上げ、それらがいずれもトゥルファン以西の中央アジア・インド産の織物、あるいは彼の地の技術が移転して織られたものであることを、文字史料を援用しつつ論証する。坂本が取り上げたのは、①大谷探検隊将来の「三日月文錦」、②ドイツ探検隊将来・インド美術館（ベルリン）所蔵の「錦ベルベット」、③同じくドイツ探検隊が発見した「金欄」

◀ 今月の『東方』

◀ 書評目次へ

▶ トップページにもどる

の三点である。

白須淨眞「大谷探検隊に関する日本外務省外交記録の紹介——第三次大谷探検隊員橘瑞超の消息不明問題を中心として」は、二〇世紀はじめに三回にわたって「西域」を調査したいわゆる大谷探検隊のうち、第三次探検の時に消息不明となった橘瑞超の問題を取り上げたもの。橘の消息不明は、当時でも国際的な問題に発展しており、その間の具体的進捗状況が近年公開された日本外務省の外交文書から窺えるようになった。本論は、その外交文書の紹介をしたものである。

以上、ごく簡単に所収論文の内容紹介を試みたが、取り扱われている時代の長さ、言語の多様さなど、評者の能力をはるかに超えており、各論文の言わんとするところを十分に伝えることができなかったのではないかと危惧する。本書の何よりの特徴は、中央アジアから出土した古文書史料に対し、一言一句をゆるがせない正確なテキストクリークと詳細かつ精緻な注解、そしてそれにもとづいて展開される論文であることが第一に挙げられる。また、出土文物を文字史料と対比することにより、トゥルファン地域で発見された織物の出自を明らかにしたことも興味深い。さらに、日本の外交文書を通じて描写する大谷探検隊史についても、その全体像の完成がまたれよう。この短い書評では、本書の魅力を十二分に伝えることは難しい。中央アジア史研究者のみならず、中国史研究者にも必読の書であることを記して筆をおくこととしよう。